

ウルトラマンビズファース

愛染マコト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如として、地球から遠く離れた惑星『ウルトラ』が大爆発を起し、巨大な怪物「怪獣」が現れるようになったこの世界の地球。

怪獣達は世界各国を蹂躪し、甚大な被害を出していた。

人類は国と国との対立などを忘れて一丸となり、防衛チーム「ERIKA」（エーリカ）が設立された。

しかし、怪獣達の中には凶暴では無い温厚な怪獣が多数居る事が報告され、その温厚な怪獣達を守るのも「ERIKA」の任務となっていた。

目次

第1話	来たぞ！我らの来訪者！	1
第2話	狙われた筈の街	9
第3話	怪獣使いの少年	21
第4話	異次元超人の侵略	31
第5話	かまいたちの禍々	46
第6話	蘇る超古代竜	50
第7話	炎魔の戦士	52
第8話	シビルジャツジメンターの出現	55
第9話	帝国猟兵出現	58

第1話 来たぞ！我らの来訪者！

「ERIKKA」日本支部に配属された新人隊員『早田 進吾』。ドジで少々頼りないが、みんなから愛されている。「ERIKKA」に入る前は、古代遺跡の調査員をやっていた。実家はパワースポットとして最近人気になっている「竜ヶ森神社」である。早田「怪獣との共存ねえ…できたら良いなあ…。準備も着実に進んでいると思います！」最新コンピューター『KURAISSU』に怪獣との共存を問われ、答える進吾。

つけっぱなしだった討論番組は怪獣災害の事ばかりだ。最近は凶悪怪獣も滅多に現れないというのに。早田「この映像…1週間前とか言ってるけど、2年前のザンボラーの事件じゃないか…。最近の映像だと言いきって…楽しいのかな…？」

ニユースで好き勝手に言われたり、完全な憎悪対象にされたりする怪獣達が可哀想だ。映像に出ているザンボラーも、人間の過剰な森林伐採のせいで暴れていただけだというのに。『大体ね？最新兵器の開発を急いだ方が良いんです！開発が見送られた『ファイヤーロダン』だって、『スパイナーR』もですよ！さっさと完成させて、怪獣なんて絶滅させたら良いんです！』早田「はあ…こんな人が居るから、怪獣との共存は難しいのかな…」『まあまあそんなに熱くならないで下さいね…？さて、『大討論ラッシュ』司会の有希 理香でした。また来週！』

気分転換にと思い早田は日課である怪獣観察をしている！

人工的に作った保護怪獣専用の島『多々良島』。怪獣達が住みやすい環境と広大な土地が常備されており、保護された温厚な怪獣が数多く住んでいる。太平洋上にある為、海で生息する怪獣達も管理されている。万が一、島から逃げ出そうとしても、強力なキャッチネットバリアーで防ぐ事が出来る。民間人でも来る事が出来、怪獣達と間近で

触れ合える事でも人気を博している。

人々に危害を加える危険な怪獣は隔離され、嚴重に管理されている。「ゴーストロンは相変わらず寝てばかりだなあ：」「おう！進吾さん！」「ビックリしてイスから転げ落ちてしまう進吾。「ははは。ごめんごめん！怪我は無い？」

進吾「何だよ蓮加……毎度毎度驚かせやがって…」

蓮加「だって進吾さんだからやってるんだよ？進吾さんのリアクション、面白いもくん」

この女性は『諸空 蓮加』。進吾の同期で、よくからかってくる。進吾とコンビを組むことも多い。友好的な宇宙人と遭遇する事が夢で、眼鏡をかけた人がタイプ。多々良島にいるゴモラが大好き。ギターが弾けて、景色の写真を撮るのが好き。「ところで、まうた怪獣観察？」

進吾「うん。おとなしい怪獣を見てると心が和むんだ。蓮加ちゃんは好きな怪獣いる？」蓮加「やっぱりゴモラかなくほらほら！可愛いじゃん！手を振ってくるし、礼儀正しいしきー！」

2人が怪獣観察をしている時、緊急出動命令のサイレンが、基地内に鳴り響く。隊長の『中河 秀行』が隊員達を招集する。時に厳しく隊員を叱るが、人当たりが良く、隊員達からも慕われている。元自衛隊出身で、隊長自ら怪獣保護をしたり、戦闘機の操縦をしたりなどする。後駄洒落を言ったりもする！

秀行「よしみんな集まったな。先ほど、瑠瑠異歪るるいえ遺跡付近のエリアB2で、謎の突起物を観光客が発見したそうだ。遺跡の関係者は「昨日の晩にはそんなものは無かった」と言っているらしい。怪獣の身体の一部かもしれない…。とにかく、その突起物を調査して来るんだ！進吾と蓮加は調査へ、高宮はここでその突起物のさらなる調査を、夢日はもしもの時があった場合の援護をしろ！」

「はい！」「化学分析の専門家『高宮 ゲン』。誰よりも地球の自然と濃厚な怪獣を愛する禿げた青年で、ノーベル賞に1番近いと言われるほどの秀才でもある。普段は明るく活発だが、研究をしたり、調査に赴く際はクールな性格になる。頼りになる(?)先輩隊員『夢日 ケント』。基本、人には敬語で接し、後輩である進吾や蓮加、高宮にも敬語で接している。しかし、正義感には誰にも負けない。少々潔癖症であり、キレイ好きで有り、鉄板ネタはホストのネタを真似する事

くく 瑠瑠異歪(るるいえ) 遺跡付近 エリアB2くく

蓮加「進吾くくん！突起物に生体反応は？あった？」

進吾「高周波の音を出して調べてみたら、この突起物の下に大きな生体反応があったよ。ここ最近小さい地震が多発してるって言うし。この下にいるのはやっぱり怪獣だと思うな。ほら、今も揺れた。昨日も徳島で5強の地震があったみたいだし。心配だなあ。」

蓮加「攻撃の手配は？」

進吾「一応チーム「フェニックス」に暴れ始めたら攻撃するように伝えておいたけど、危険だからここから離れておこうか。行こう、蓮加。」2人が離れようとしたその時、突起物が赤く光り、謎の鳴き声が聞こえたかと思うと、大きな地震と爆風が発生、調査チームの何名かと進吾、蓮加は爆風によって吹き飛ばされてしまった。蓮加「きゃっ！」

進吾「蓮加！大丈夫か!?」蓮加「イタタタ。足をくじいちゃったみたい。私の事なんていいから、進吾は先に行つてて！」進吾「ダメだよ！蓮加：ほらっ！俺に乗って！」進吾は蓮加をおぶさって、全力で走り出した。

進吾「なんだ？あの怪獣！」蓮加「容姿は：顔がデマーガとギガザウルス。身体はサルファス。背中はゲラン。足はダイゲルン。尻

尾はゴメスに似てない？」進吾「うん！確かに後さ…この怪獣…手足に鎖が付いてるよなあ…。どこかで捕まっていたか、主人の所から逃げてきたのか？」蓮加「まず、隊長に報告するわ！」

進吾「だなあ！」

秀行隊長「破壊活動しか能が無いようだな。よし！『コンデイションレベル：レッド』発動！進吾、蓮加よ！久々の凶悪怪獣だ！『スパーガン』で攻撃をせよ！」

進吾&蓮加「分かりました！」

謎の宇宙怪獣は熱光弾を発射しながら、歩いて来た

進吾と蓮加めがけて怪光線を発射した。

蓮加「きゃーっ！」

進吾「あつ！蓮加ちゃん！うわあ〜！」

蓮加「大丈夫？進吾くん！」

〜光の空間〜

進吾「蓮加は、大丈夫か？」

巨人「いや！君こそ、死んでしまった！ヘッヘッヘッヘッだが、心配することは無いぞ！」

進吾「分かっているぜ！一体化するよ！貴方と！そうすればあの怪獣に対する勝利の法則も分かるしな！」

巨人「分かってくれてありがたい！おつとつと！自己紹介がまだだったね。私は遠い遠い宇宙の果てにある『B-15惑星』からやって来た光の戦士、ウルトラマンビズファースだ！宜しくね！」進吾「ウルトラマン…本当にいらつしやっただすね！」ビズファース「『惑星ガウス』で悪事を働き、捕らえられた凶悪な怪獣、ゲレーカが暴れている所を見たんだ。私も必死になって食い止めようとしたよ…」

進吾「そのゲレーカって怪獣は、なんで捕まっている筈なのに暴れていたんだい？」ビズファース「手足に付けられていた鎖を引きちぎっ

て脱走したのさ」進吾「手足に鎖!?まさか……!」ビズファアス「ああ。そのまさかだよ。さつき地球に現れたあの怪獣こそがゲレーカだ。奴は私を退けて惑星ガウスを滅ぼし、この地球の地底にやって来たんだ!私も奴にやられたせいで体力を失い、この場所から動けずにいた。奴は平和がある事を嫌い、そこを焦土と化す恐ろしい怪獣だ!そして厄介なことに地底に巣を作る!」

進吾「そんな酷い怪獣なのか……ありがとうビズファアスさん!あつ!自己紹介がまだでしたね!僕は早田 進吾!よろしく!」ビズファアス「進吾か、良い名前だな……進吾:君に折り入って相談があるんだ:」進吾「なんですか?ビズファアスさん?」ビズファアス「実はゲレーカを倒すつもりなんだ!だから君は私と同化して、一緒に戦ってほしいんだ。私はゲレーカに負わされた傷がまだ癒えていない。君のその精神力があれば私は本来以上の力を得られるはずだ!……良いかな?」

進吾「良いですよ!ビズファアスさん!」

ビズファアス「ありがとう。まず君にはこれをあげよう。これは『メタモビジター』。それがあれば、君と私は一体化出来るのだ!」

筒状の変身アイテム『メタモビジター』を進吾が受け取ると、ビズファアスはそこに吸い込まれていった。

ビズファアス「ここから先は君次第だよ!一緒に頑張ろうぜ!!進吾!」眼が覚めると、そこは蓮加が居る病院の前だった。ビズファアスが送ってくれたらしい。「はっ!?……ゲレーカ!」ゲレーカはちょうど、光弾をこの病院に放とうとしていたところだった。口から大量のエネルギーが漏れているのが見える。こんなもの、生身の人間が喰らったらひとたまりもない。

そして、蓮加の叫び声が病院内から聞こえて来た。蓮加「キヤアアアアアアア!!」進吾「ハッ!蓮加!?くそっ!今助けてやるぞ!」蓮加を助けようと、進吾は『メタモビジター』を天高く掲げている叫んだ。

進吾「ビズファアアアアアア……ス!」

病院の周りを眩しいくらいの光が覆う。蓮加は光弾に巻き込まれて死んだと思った。オペレーションルームに居た高宮と大松奈隊長、数人の助けを連れて来たゲンももうダメだと思った。

しかし、その光の中から現れた光の巨人、『ウルトラマンビズファス』が彼女を守った。ゲレーカの光弾をいとも容易く受け止めて。

蓮加「…あれ？生きてる…？ああ…温かくて優しい光…。おっきい…あなたが守ってくれたの…？ありがと…う…うん？この感じ…：まさか…：」蓮加は気を失ってしまった。無理もない、自分は死んだと思っただからだ。

ビズファスは頷き、ゲレーカの元へと歩み寄っていった。「はっ!? あの巨人は!？」

「巨人!? 巨人だと!？」

「はい! 蓮加隊員が居る病院の前に…巨人が…! 敵でしようか!」
「いや、あの巨人はアンナを守ってくれた…敵ではないはずだ。今は、あの巨人だけが頼りだ!」

ビズファス「ハアッ!」ビズファスはゲレーカの頭に蹴りを入れ、先制攻撃をしたのだ! ゲレーカはすぐさま光弾を発射するが、ビズファスはバク転で全てかわし、負けじと光弾を発射した。ビズファスの光弾はゲレーカの腹に直撃し、喰らったゲレーカはよろけたのだ! そしてビズファスはすぐに必殺技の構えをとる。右手を右の腰辺りに、左手を右の脇辺りに持っていくエネルギーを溜め、すぐに両手を胸の辺りまで持っていく斜めにスライド。そして腕をL字に組み、光線を発射する! ビズファス・進吾「ビズニウムショット!!」『ビズニウム

シヨット』はゲレーカに直撃し、ゲレーカはうめき声を上げると同時に爆発した。

「うおおおおお!!! やったああああ!!!」

「巨人が勝った!」

秀行「…うむ、凄い戦いだった…。ありがとう…光の巨人…!」

ビズファス「シユワツ!」ビズファスは空に飛んでいった。「ありがとうなあ〜!」「お疲れさ〜ん!」

進吾「蓮加…蓮加…蓮加…!蓮加!蓮加!!」

蓮加「…へっ!?はっ!?し…進吾…?進吾くん!良かった!元気な生きていたんだね!」

進吾「蓮加ちゃん!心配してくれてさ…その…ありがとう…」蓮加「ねえ!私が怪獣にやられそうな時にね!…こーんなに大きな宇宙人がさ!助けてくれたの!その後気絶ちゃったけど…。もう一度、会いたいなあ…温もりがさ、進吾くんに近い温もりをしていたの!」進吾「僕もさ!その宇宙人に助けてもらったんだよ!」蓮加「え!?進吾も!?!うーん…何て言う名前だったんだろかな…?」

進吾「ビズファスさんだって!ウルトラマンビズファス!其れが彼の名前だよ!彼が教えてくれたんだ!」蓮加「へえ…ビズファスって言うんだ…!名前もカッコイイなあ…!」

進吾「……あの！ビズファアスさん！」ビズファアス「なんだい？進吾」
進吾「もうゲレーカさんを倒したけど……まだ地球に居るのかい？」ビ
ズファアス「ああ！この星は美しい！実に自然豊かな星だ！私はこの地
球を気に入ったよ！これからもよろしくな！進吾！」進吾「ああ！ビ
ズファアス！これからも一緒にこの地球を守っていこう！……そうだ！
いろんな星を旅してきたんだよね！僕に話してよ！僕もいろいろ知
りたいしきー！」

ビズファアス「じゃあまずは、レイフ星の話でもしようか」

ビズファアスは夜空の下、これまでの旅の話をしてくれた。しかし彼
らは、これから起きる戦いなど、知る由もなかった。

ウルトラマンビズファアスの戦いはまだ始まったばかりなのだ！

第2話 狙われた筈の街

昨日のウルトラマンビズファスの出現の興奮冷め止まぬ「ERIK A」日本支部のオペレーションルーム。

進吾は当然、ビズファスである事を隠している。パニックになったら大変だと思ったからだ。ゲン「うわ…凄いですね…。新聞にテレビにネットニュースにSNS…ほとんど全ての情報ツールで、昨日出現したウルトラマンビジターの話題で持ち切りですよ…」ケント「進吾さんに蓮加さん。君達はビズファスさんに助けられたんだろう？どうだった？近くで見てください」蓮加「私の場合、すぐに気を失っちゃったので…。でも良いなあ〜進吾は！名前教えてくれたんでしょ？」進吾「うん。結構良い声だったぜ！蓮加が好きそうなタイプだと思うなあ〜」蓮加「やっぱり?!私の場合はドストライク！友好的な宇宙人だったらしいし、私の中の株価がメチャクチャ上がってるよ！」ケント「宇宙人自体初めて見つかったって言うのに…。だけどビズファスには人間に化ける能力とかは無いんですかね？あの姿なら、やっぱり人間に化けた方がこの地球で活動するには都合が良いですし…」

「(ギクツ)」進吾「ほへ〜。人間態ね…」蓮加「ねーねー。進吾は知らない？ビジターの人間態とか」進吾「えっ？あつ…ああ！蓮加実は、僕も知らないんだよね…。ははは…」蓮加「そつかく残念だな…」隊長が皆を招集する。秀行「みんな集まったななせまる？昨日、風情のある夕焼けの街で知られる眼鬼路メトロ町のとある空き地に、1日足らずでアパートが建つたらしい」進吾「それがどうかしたんですか？」秀行「うむ。そのアパートはその日に出来たはずなのに、外観はボロボロのサビだらけらしく、辺りには埃が積もっているらしいんだ」蓮加「何年も前のじゃないとそんなことにはなりませんよね。怪しい…」ケント「そうですね！蓮加さん！」

秀行「上層部はウルトラマンビズファスの出現により、明確に宇宙人は存在していると判断し、『問題のアパートにも宇宙人が潜伏している可能性が高い』との判断だ。実際、アパートからは僅かだが、不思議な生体反応があった。そこでだ。進吾、蓮加。お前たちは今日と

明日、そのアパートに行ってもらおう。もし宇宙人が居た場合、友好的なのであればコンタクトを、友好的ではなく、襲いかかって来た場合は攻撃だ。気をつけろよ。2人とも」進吾&蓮加「はい！」進吾「ここか？」進吾と蓮加が到着したアパートは、隊長が言っていたように「オンボロ」以外の感想しか無かった。2階へと繋がる階段の手すりは、少しでも寄りかかれば、すぐに折れてしまいそうな感じだった。サビもわんさか付いている。辺りには埃が積もり、雑草も大量に生えている。ここだけ、50年前の建物のような感じだった。周りにはきれいな一軒家しか無いのも、このボロアパートの場違い感と、時代遅れ感を演出している。

アパート横の石には、うすい文字で『こちら、アパート『銀河荘』入居者募集中 受け付けは2階 1階は『飯江玩具店』 怪獣のおもちゃ 売ってます』

と書かれていた。進吾「本当にボロいなあ……」

蓮加「一階は丸ごとおもちゃ屋なんだって！。えっと……『飯江めしえ玩具店』って名前みたいねとりあえず、お店の人に話を聞いてみようよ！進吾！」進吾「分かったよ！蓮加！」「いらっしやい」店主らしき男があいさつをする。緑の服を着ており、店の外観と比べるとなかなか派手だ。というより、店の内装も外観と比べるとキレイだった。さまざまなおもちゃが置いてある。どれもこれも、普通のおもちゃ屋には置いてなさそうな商品ばかりだ。進吾「すいません。このお店の主人ですか？」飯江店長「ああ、そうだよ。私の名前は飯江。ほら、表にも書いてあったらう？」蓮加「私達は『ERIKA』の者なのですが。飯江さんはこのアパートの住人なんですか？」

飯江「あ……ああ……」進吾「他に住人の方とか、従業員の方とかは居ないんですか？」飯江「皆んな今はバイトだよ。この店は私だけでやってる」蓮加「皆さんのようなバイトを成されているのでしょうか？」飯江「地下鉄の駅員とか観覧車の管理とかしてる奴は知ってるがそれ以外は知らないな。このアパートの大家さんは2階で煙草とか携帯電話を売ってるぜ。今は行かない方が良いな。昼寝してるだろうから」進吾「飯江さんのお店は……おもちゃ屋ですよ？」

飯江「そうだよ。イチオシの商品は… 怪獣のソフビだな。良い出来だよ」蓮加「ホントだ… ゴモラもある！私、怪獣のソフビって初めて見るかも！ってか凄い良く出来てますわ！飯江さん！」進吾『『多々良島』で保護してる怪獣がほとんどソフビになってるんだ…。凄いな…』飯江「店主の俺が個人的に好きなのは… キングザウルス三世とかアーストロンかな。あ、テロチルスもだ。なんか愛着が沸くんだよ」蓮加「怪獣に御詳しいんですね」飯江「あ、まあ… 詳しく無かったらこんなおもちや売ったりしないしな…。ここにあるのは怪獣のおもちやばっかりさ」

進吾「何聞いているの？蓮加ちゃん！怪獣のソフビを売っているから、詳しいに決まってじゃん！」

男「やあ、どうも店長」緑のローブを着た男がおもちや屋に入ってきた。飯江とは顔馴染みのようだ。進吾「すみません。『ERIKKA』の者ですが。貴方もこのアパートの住人ですか？」男「え？あ… いや違う違う！私は羽屋 丈二。しがないビジネスマンです。このアパートの皆さんにはお世話になりましたが、住んではいませんよ」飯江「羽屋、例の物持ってきたのか？」丈二「ああ、そうでした。ちやんと持つてきましたよどうぞ。！」進吾「おお… ネズミのおもちやですか？」蓮加「可愛い〜！」丈二「これは動くネズミのおもちや『ロボネズ』。店長が一番欲しがってたおもちやですよ」飯江「ありがとうな」

丈二「良いって事よ」進吾「あ、俺達このアパートの事を良く聞けたんでこの辺りで帰りますね」

蓮加「あ！すみません！これ！御願ひ致します！」

蓮加は商品のゴモラのソフビを飯江の居るレジに差し出した。飯江さん「800円だよ。まいど、ありがとうね」

進吾「色々すいませんでした。では！」

蓮加「さようなら〜」「… はあ…」「… ふう…」二人は、進吾と蓮加が視界から消えたのを確認すると、どつとため息をついた。丈二「大丈夫だったかい？店長？」

飯江「まあビビったな…。地球人のお客だったし。何よりも防衛

組織だ。勘違いされてぶっ殺されても困るしな」

丈二「あ、大家さんは？」飯江「上で寝てるよ。商売上がったりたいでな」丈二「昔は宇宙ケシの実とか使ってブイブイ言わせてたのにねえ……。」飯江「もう50年も前の話だろうが」丈二「店長だってあれだろう？変なバンド使って女の子操ったりさ、してただろう？」飯江「昔の話さ。ちゃんと白鳥座出身のエリカちゃんには謝っておいたよ。相手も許してくれたみたいだし、年賀状来るしな」丈二「地球で元気に暮らしてるんですね」飯江「お前だってあの拉致った女の子、どうしてるんだよ？」丈二「拉致ってなんかいませんよ！あれもちゃんと本人との合意の上でやっただけで！まあ、美樹さんは今でも元気ですがね！」

飯江「相変わらず、地球の酒は美味いか？」丈二「ええ！あんなに美味しい飲み物は宇宙のどこ探しても見つかりませんよ！最近ファイル星人の5人組が近くでバーを開いたようで。あの人達のポテトが作る酒の美味しいこと美味しいこと」飯江「ああ、確かベロンって言ったっけか。ただの酔っぱらいだと思ってたが……。」丈二「あれ？ブラコさんは？住んでなかったですっけ？」飯江「北海道で牧場主になったよ。羊の」丈二「ジンギスカンとか送って来てくれませんかね。北海道の食べ物美味しいくて好きです。あ、ギロンさんとケムールさんはそれぞれ地下鉄と観覧車のバイトですかね？」飯江「そうだよ」丈二「アリブントとメフィラスさんのソフビがそろそろ入荷するらしいんで伝えたかったんだが……。店長、伝えてくれないかい？」飯江「別にいいけど。あいつら喜ぶぜ」丈二「おっと、もうこんな時間。アクマニヤさんに目薬渡す約束をしたのをすっかり忘れてしまう所でした」飯江「あ、出掛けるんだったら……これ頼む」丈二「これって……レプリカのレオリングですかい？誰宛に？」飯江「ババルウだ。公園の清掃員のバイトで子供たちと仲良くなったから楽しませるために欲しいんだってよ」丈二「へえ……人って変わるもんなんですね……。あ、ババルウさんの居る公園の名前を教えてくださいませんか？」飯江「たしか……『大府公園』って言ったっけかな。ま、よろしく頼むわ。そろそろ日も落ちるし」丈二「では店長！また今度

！ロボネズは大事にしてね〜」飯江「おう〜」アパートからの帰り道、進吾と蓮加は先ほどの飯江と羽屋を怪しんでいた。蓮加「うーん……。ちよつと怪しかったよね、あの御二人」進吾「うん。だけど宇宙人にしては侵略の意志が無さそうだったな……。優しかったしね」

蓮加「明日は2階に居るらしい大家さんを訪ねなきゃね」
「パム〜」可愛らしい鳴き声がどこからか聞こえてきた。蓮加「進吾〜。可愛い声だしても、私は惚れたりしないよ〜？」進吾「え？俺じゃないよ〜！」
「パム〜」蓮加「あ、また聞こえた！え？進吾じゃないの？」進吾「蓮加でもないよな？」蓮加「うん……。」「パム〜」

進吾「後ろだな……。」「蓮加「後ろね……。」「

恐る恐る、二人が後ろを振り向くと、可愛らしい生物がふわふわと空を飛んでいた。

「パム〜」蓮加「うわ〜っ！可愛い!!!モフモフしてる〜！」蓮加が頬ズリをする。」「パムウ……。」「

謎の生物は少し嫌そうだ。

蓮加「ねえねえ、名前は？」

「パムムム〜」

蓮加「名前なんだけどき！パムム〜ってのはどう？」

進吾「いや！羽が生えてるから、『ハネジロー』っていうのはどうだ？」「ハネジロー」「パム〜！パム〜！パムム〜！」

蓮加「凄く喜んでるわ〜。そんなに気に入ったのね？まあ……。ピグモンみたいな珍獣の類いかな。一応、隊長に連絡しとこう」進吾と蓮加は、ハネジローを保護し、その場を去った。〜次の日〜 進吾

「すいませ〜ん。大家さんはいらつしやいますか？」ハネジローの調査の為に蓮加は基地に留まる事になり、進吾一人だけでアパートの大家を訪ねる事になった。大家の部屋の前は、何故かとても煙草臭い。周りに吸い殻が落ちているわけでもないのだ。

進吾「…居ないのかな？あの〜すいませ〜ん。って、うわあ〜っ！」突然、部屋の扉が開いたと思うと、進吾は部屋に引きずり込まれしまった。「うわあああああ〜っ！」

「お目覚めかい？」進吾「ん……。えっ!?宇宙人!？」進吾の目の

前には、まるで明太子のような宇宙人がちやぶ台を挟んで向こう側であぐらをかいて座っていた。☒☒「ようこそウルトラマンビズファス。我々は君の来るのを待っていたのだ」進吾「えっ？何で俺の正体を？」☒☒「ハツハツハ。まあ、そんな事より蓮加隊員も呼んだらどうだい？楽しくなるさ。質問があるんだろう？ほら、何なりと質問してくれたまえよ」進吾「まっ…まず、貴方の御名前は…？」☒☒「私かい？私はメトロン星人。このアパートの大家をしているよ」ビズファス「えつと…。いつから地球に？」メトロン星人「かれこれ50年も前からさ。50年前は地球の侵略計画なんてのも、模索したものだ」進吾「侵略の意志があるんでしょうか!？」メトロン星人「おっと、怖い顔しないでくれ。何、とうの昔さ。今はこの地球を侵略しようなんて気は無いよ」進吾「あ、すいません…カッとなってしまつて…。質問に戻りますね。50年前の侵略計画を教えてくださいませんか？」メトロン星人「ああ。宇宙ケシの実つていう宇宙の大麻を煙草に入れて、人類の脳を狂わせるって作戦だったよ。そして人間の信頼関係を壊し、その隙に侵略!まあ…失敗したんだがね」進吾「どうしてですか？」メトロン「1人の男に邪魔されてね…諭されたよ。そいつはこう論じたのだ!君達が侵略なんてすれば、この美しい地球は薄く汚れてしまう。君達は地球の美しさに惚れたのではないのか!？」

とね。まあ…交渉は決裂し、そいつのせいで何針か身体を縫つてしまったんだが…」進吾「その方とはそれつきりですか？」メトロン星人「ああ。それつきりさ。そいつも宇宙人だったが勇氣ある奴だった…。今は母星に帰っているらしいが。あ、私は元々この世界とは別の世界から来たんだがね。今頃、彼はその世界に居るだろう…。会えないのだよ…。」メトロン「君もずつと私がこの姿だと怖いだらう?」進吾「あ、いえ。別にそんな事は…」メトロン「よつ、と」メトロン星人は人間の姿に変身した。

黒い服を着て、髪は白髪にまみれている。

気前のいい紳士のような出で立ちだ。メトロン「せっかく来たんだ。御茶でもどうだい」進吾「あつ…有難う御座います…」丁度、喉が渴いたのでメトロン星人が差し出したお茶をありがたく思いなが

らも、怪しむ進吾。何せ、パツケージにメトロン星人がデカデカとデザインされ、商品名も『眼兎龍茶』と言う名前だ。胡散臭い事この上ない。毒でも入ってそうだ。メトロン「ハツハツハ。毒なんて入っていないよ。ほれ」そう言うのと、メトロン星人は美味しそうにお茶を飲んだ。

進吾も思わず生唾を飲む。あまりにも美味しそうに飲むからだ。メトロン「かくくっ！美ちくく！ほれ、君も」

進吾「あ、いただきます…」メトロン星人はニヤニヤしながら進吾を見ている。少し恥ずかしい。

一口飲んだ。進吾「あつ…美味しい…！」メトロン「ハツハツハ！良い顔をするね！そうだろう？何せ、宇宙から取り寄せた選りすぐりの食材を使っているからね。地球の酒に匹敵するさ」進吾「あの…質問に戻るんですが、メトロンさんは何故ここにアパートを建てたんですか？」メトロン「うむ、良き質問だね。まあ、君ら的にはそっちの方が本題か。このアパートは元々、隣町の北川町にあつてね。最近まですつと50年間、そこで暮らしていたんだ」進吾「何故、ここに移したんですか？」メトロン「元々建てた土地の下に怪獣が居たんだよ。しかも凶暴な怪獣であるヨロガさ。君らも前に保護に失敗したんだろう？しかもヨロガの他にもう一体居た。ケムラーに似たドフィラスという怪獣さ。ドフィラスの方は我々が勝手に命名したが」ヨロガは保護対象されていない危険な怪獣で、進吾が「ERIKKA」に入る前にも現れていたらしい怪獣だった。

進吾「えっ？2体も!?!何で通報しなかつたんですか!?!」

メトロン「通報なんてしたら我々の正体がバレて、何されるか知ったこつちやない。我々も我々で、境界を張ったり色々したさ。だけどそろそろ無理だ。近くで大規模な工事があつて、境界に激突されてね。耐えるのも限界さ。だから移った。怪獣共が復活したら戦う気でもあつたんだぞ？こつちにもデスレ星雲人やグローザ星系人みたいに戦うのが得意なのが居たしね。ま、今回は君に任せるよ。ウルトラマンビズファス君。北川町の人たちは境界が破られると同時に、この町に転送されるシステムになつている。安全に戦えるだろう。建

造物の弁償は我々がするよ。直すのが得意な奴も居るしね。準備万端って事さ」進吾「まあ…別に良いんですけども、いつぐらいに復活…!？」地響きと、小規模の地震が発生した。メトロン「来たか…。ほら、窓を見たまえ。奴らだ。復活しやがったな…」巨大な土煙と爆音と共に、2体の怪獣が姿を現せた。

先ほどメトロン星人が話していた怪獣、ヨロガとドフィラスだ。

2体は雄叫びを上げ、北川町を歩いていく。進吾「貴重な御話と御茶、有難う御座いました!では!ジーっとしていても如何にも成らないのでこれで!」進吾は一目散に怪獣達に向かって駆けていった。メトロン「ふっ、本当に彼は君に似ているな…。ウルトラセブンよ……………」

進吾「隊長!北川町に怪獣が2体出現!獰猛なヨロガと、新種の怪獣ドフィラスです!ドフィラスの名前は…俺が付けました!攻撃許可を!」進吾は無線で報告する。秀行『わかった!進吾はスーパーガンで追い討ちをかけておけ!すぐにチーム『フェニックス』を出撃させるからな!』

進吾「はい!」進吾はヨロガにめがけてスーパーガンを照射したが、手応えが無かった。

それもそのはず、ヨロガは硬い表皮に覆われた怪獣なのだ。進吾「くそっ!硬い装甲だな…」

ウルトラビートルで駆け付けたチーム『フェニックス』も、ヨロガの防御力に苦戦していた。

2体も、火球を吐いて攻撃してくる。

チーム『フェニックス』は、攻撃目標をドフィラスに変更する。

「ドフィラスに『ペンシルシャーク』を発射!」

攻撃用ミサイル『ペンシルシャーク』はドフィラスに直撃し、唸り声を上げながらドフィラスは活動を停止した。「よっしゃ!ドフィラスの撃退に成功!」「はっ!待て!」

ドフィラスの身体が青白く光ったかと思うと、背中が裂け、裂け目からドフィラスが復活した。

ドフィラスは脱皮をする怪獣だったのだ。

「脱皮した……！」

「ドフィラス、活動再開！脱皮をしてダメージを防ぎました！」

「くそっ！どうしたら良いんだ!?」怪獣が復活したと聞き、慌てて帰って来たアパートの宇宙人達は、1階のおもちゃ屋から心配そうに様子を見ていた。

「お、良いぞ！そこだ！行け！」

「マグマ……少しだけ黙ってくれないか？うるさい」

「あんな怪獣共、俺ならすぐにカチコチに凍らせれるっていうのによ……」

「まあまあ、ここは「ERIKKA」と、ウルトラマンビズファースに任せましょうやー！」無駄に張り切ってるな……レイビーク「まあ、無理もない。久々のウルトラファイトを見られるのだから。おい、レキキュム。テレビを点けてくれ」「うい」

『北川町に現れた怪獣2体は、なおも侵攻を続けており……』

「ああ……俺らが住んでた町が……」「そう悲しむなザゴン。おい、キュラソとスチールも泣くんじゃねえ」「俺のバイト先のガソリンスタンドが……」「動物園……パンダ……」

「あーはいはい。俺らで直せば良いし、パンダとかも檻ごと転送しただろ？気にするなっつて」「店长、スフィックスのソフビある?」「こんな時におもちや買うんじゃねえ!」「おい、見ろ!とうとうお出ましたぞ!」「ゲレーカ倒したらしいけど、どんな感じなんだろ。カツコイかな?」「昔は光の巨人が憎たらしかつたが……応援するようになるとは……」「ま、昔の対立なんぞ忘れて、応援しようぜ。宇宙の救世主、ウルトラマンビズファースをな!」

進吾「生きましょう!ビズファースさん!」

ビズファース「嗚呼!」

進吾「ビズファアアア……ス!」メタモビジターを掲げると、進吾の身体が光り輝く。

そして進吾は光の巨人、ウルトラマンビズファースへと変身した。ビズファース「シユワツ!」2体の怪獣は雄叫びを上げ、ビズファースに向かっていった。ビズファースがヨロガに先制攻撃の蹴りを入れる。よ

ろめくヨロガ。

ドフィラスも火球を吐いて応戦するが、ビズファスは火球を弾き、ドフィラスの顔にパンチを浴びせる。

「ビズファスを援護するぞー！」

「はいー！」

チーム『ファルコン』に援護され、たじたじな2体の怪獣。そこへビズファスが光の剣『ビズファアブレード』を展開し、ドフィラスの胴体を真一文字に斬った。

ドフィラスはその場へ倒れる。ビズファス「やったか!？」進吾「いや…まだまだ…と思うぜ！」またもや脱皮して、ダメージを受け流すドフィラス。ビズファスが呆気にとられている隙に、ヨロガの体当たりをもろに受けてしまった。

「大気が乱れてきやがった…。何か来るぞ…。」

ゲレーカが来た時に起こっていた現象が、また発生していた。

「もう一体の怪獣!？」

イカルス星人「イカン！イカンよこれは！イカほどなんじやないカ！」

空を突き抜けて、地上に現れたその怪獣は、鋭利な爪を持ち、尻尾はスパイクのようにトゲトゲしており、頭から一本角が生えていた。

「大家さん！宇宙怪獣だ！」

「ふむ、ズパイラスと言った感じかね…。しかしまずいな…。これでは3対1だ…。」

突如として現れたズパイラスは、ビズファスを長く鋭利な爪で攻撃してきた。

「グワアアッ！」

ビズファスはその場に倒れこんでしまった。胸のカラータイマーも点滅を始める。

「…せめて2対1に出来れば…。よし！ヨロガの関節を狙え！あんなに表皮が硬いんだ、関節は比較的柔らかいはずだ！」

「了解！『ペンシルシャーク』発射！…これでも食らえ！」

チーム『フェニックス』が発射した『ペンシルシャーク』は、ヨロ

ガの関節部を直撃した。

うめき声を上げてその場に倒れこむヨロガ。

弱点の関節部を攻撃したからだろうか、硬い表皮が次々に剥がれ落ちていく。

「今だービズファースー！」ビズファースは頷き、『ビズニウム光輪』を発射した。本体が丸出しのヨロガの首をはねると、ズパイラスの長い爪も切り裂いた。

続けざまにビジターは、ズパイラスめがけて『ビズファアブレード』を展開し、真一文字に切り裂いた。

一気に形勢逆転、残るはドファイラスのみになった。

ビズファース「シユワツ！」何を食らっても脱皮するドファイラスに対して、ビズファースは『重力光線』を発射した。

とてつもない重力が、ドファイラスを襲う。

脱皮の為の皮がどんどん裂けていき、もう脱皮出来ないツルツルの本体が丸裸となった。

すかさず、必殺の『ビズニウム光線』を発射し、ドファイラスは大爆発を起こして死亡した。

「やったああああー！」

「うおお！凄いやー！ウルトラマン！」

「俺、感動しちゃった！」

「諸君！ウルトラマンビズファースの勝利記念に、パーツとするか！」

「俺達の援護、少しは役立ったかな…？」

「ありがとうな、ビズファース！」

「お疲れさんでーす！」

「ジユワツ！」

役目を終えたビズファースは、天高く飛んでいった。その背中には、燦々と輝く美しい夕日があった。進吾「色々、ありがとうございまして！」進吾は北川町の建造物を直していた宇宙人達に例を言った。丈二「良いって事よ！」

飯江「あんたの活躍、見せてもらったぜ！」

黒座「俺が凍るかと思うぐらいの刺激を、ありがとうな！」間口魔
「俺…感動した…。地球守る…。お前に…」

鵜「いやあ、良いんじゃないカ！スゴかったんじゃないカ！」
奥からメトロン星人が歩いてくる。

メトロン星人「これから、私が愛したこの地球をよろしくな。ウ
ルトラマンビズファス！」

進吾「…はい！」メトロン星人「うむ！良い返事だ！あ、どうか
ね？『眼兎龍茶』でもどうだ？冷えてて美味いぞ！」

進吾「有難う御座います！」
「ふう……」

自分の部屋でため息をつくメトロン星人。

その時、ドアを開けて誰かが入ってきた。

調査の為、この世界の地球にやって来た伝説の戦士、モロボシ・ダ
ン、その人だった。メトロン「おお……。ふふつ、ようこそ。久しぶ
りだねウルトラセブン。私は君の来るのを、51年間待っていたのだ
よ…。」ダン「はははっ。どうした？メトロン？泣くほどかい？」メト
ロン「いや、ついね。すまない。君のお蔭で全うに、楽しく、人生を
過ごしているよ。まだ縫った所は痛いがね…。はははっ」

メトロン星人とモロボシ・ダンは、ちゃぶ台を囲みながら談笑した。
そう、50年前のあの時のように…。

続く

第3話 怪獣使いの少年

少年「おじさん」

男性「何だい？」

少年「おじさんは、何でいつも穴を掘ってるの？」男性「僕は円盤を探してるんだよ」少年「円盤？」男性「ああ。人間と宇宙人の架け橋としてね。見つけれたら、メイツ星ってところに行くんだ。僕の恩人を知ってる人たちに…謝らないといけなからね」少年「…僕も掘る！」

男性「お、そうか！君、親は？」少年「いない」男性「そうか…。昔の僕を見てるようだよ。名前は？」少年「金山！」男性「え？」少年「金山って言うんだ！良い名前でしょ？」男性「ああ…良い名だ…。うん…」少年「ん？おじさん…何で泣いてるの？ねえ、おじさん。おじさんってば！おじさん!！」

くくガランとしている「ERIKKA」日本支部のオペレーションルームくく

それもそのはず、進吾1人しか居ないのだから。

隊長は、今日は野暮用がある。とだけ言い残してどこかへ。

夢日は、新たに設立された「ERIKKA」オーストラリア支部の現場視察へ。

高宮は、日夜研究を続けていた最新防衛プログラム『マケット怪獣』の調整へ。蓮加はハネジローと共に、月に一度の『多々良島』の保護怪獣の健康診断に行っていた。進吾「暇だなあ…。怪獣観察をしようにも、保護区内に居る怪獣達は健康診断用の施設に行つて一頭も居ないし…」

その時、通報用の電話が鳴った。進吾「はい！こちら、「ERIKKA」日本支部です！」

「ああ！「ERIKKA」の人！助けてくれ！俺は無流ムル町に住んでるんだがよ！」

電話越しなので詳しくは分からないが、40後半ぐらいの男性だった因みに声は清水紘治風の男であった

相当焦っているようだ。進吾「どうされましたか!？」

清水紘治風の声の男「僕は散歩するのが日課なんだけどよ、最近になって良くわからねえガキが1人で、河川敷に勝手に穴を掘ってるんだ!注意しても止めやがらねえから、さつきキレて、穴をスコップで埋めてやったんだよ!そうしたら、ガキの後ろに鮭みたいなデケエ怪獣が居やがったんだ!」進吾「か:怪獣?」清水紘治風の声の男「ああ!そのガキは宇宙人で、怪獣を使って人間を抹殺する気なんだよ!そうしか考えられねえ!あんた、「ERIK A」の隊員だろ!?!怪獣なんてすぐぶっ殺してくれよ!俺らの町が宇宙人のせいで壊されてもいいのかよなりしてくれよ!俺らの町が宇宙人のせいで壊されてもいいのかよ!?!」進吾「あ:でも:。上層部に報告したり、その怪獣が温厚な怪獣なのか調べたりしないと:。それにその子が宇宙人なのかも分かりませんし:」男「あんだと!?!使えねえな!宇宙人なんて、ロクなのが居ないんだよ!さつきとそのガキ殺せよ!」そう言うと、男性は乱暴に電話を切った。

宇宙人にそんな偏見を持たれているとは:進吾は悲しくなってきた。ついこの間、善良な宇宙人達に遭遇した矢先だったので余計にだ。現に、自分も宇宙人であるビズファースと融合している身である。らちが明かないので、男性が言っていた無流ムル町の調査に行く事にした。どうせ此処に居ても何も無い。外の空気でも吸っておこうと思った。何せ、ここ最近は何も働かなくなったからだ。目も痛いし、肩も凝って来ている。

メトロン星人に教えられた『ちよつと強めに揉んでくれるマツサージ屋』にでも行こうとも思ってきた。く無流ムル町く 噂には聞いて居たが、お世辞にも「空気が綺麗」とは言えない。川を挟んだ奥には、コンビナート地帯が広がっている。汚さそうなガスが、煙突からモクモク出ている。何でもここ一帯は有名な酸性雨地帯のようだ。

(ザツ:ザツ:)川に沿って少し歩くと、砂利と砂利が擦れ合う音が聞こえて来た。

進吾「うわあ:。こんなに大きな穴を:?!」進吾が見た光景は、圧

巻の一言だった。

隕石でも落ちてきたのかと疑うぐらいの大穴が空いていた。おおよそ50mはありそうだ。まず、最近来た子供が掘れそうな深さでは無い。

かなり深いので、下の方はさぞ暗いんだろうと思つてのぞいて見たが、ランプなどが付けられていて意外と明るかった。

ランプに照らされながら小学校低学年ぐらいの少年が、ひたすら一心不乱にシャベルを動かしていた。

この状態で喋りかけるのは、いささかどうかとも思つたので、近くの人に話を聞くだけにする事にした。

河川敷の上で穴をじっと見つめていたおばあさんが居たので話を聞く事にした。進吾「あの…すいません…」

おばさん「はい。どうしたんだい？」進吾「穴を掘つてるあの子とお知り合いですか？」おばさん「ふふっ…。あの子の名前は穴掘り少年じゃないよ。金山くん」と言うんだ。ちなみに私は、パン屋をやつておる」進吾「金山くん…ですか？」パン屋のおばさん「うんうん。あの子を宇宙人だなんて言う人がいるみたいだがね、芯が強い子だよ。あのおじいさんと同じ名前だしね」進吾「おじいさん…？」パン屋のおばさん「あ、こちらの話さ。気にしないで下さい」進吾「あ…はい。あの…金山くんが穴を掘る理由つて、知つてたりしますか？」パン屋のおばさん「それを聞くのなら、佐久間くんに聞きなさい」進吾「佐久間くん？」パン屋のおばさん「あの子の親代わりになっている人だよ。あの子は両親を早くに亡くしてね。佐久間くんが面倒を見ていたんだ」進吾「あの…その佐久間さんと言う方は何処にいらつしやいますか？」パン屋のおばさん「今日は居ないみたいだよ。いつもは金山くんと一緒になつて穴を掘つてたんだがね」変だ。と、進吾は思つた。

その佐久間と言う人が、金山くんと毎日一緒に穴を掘つていこうのなら、あの電話の男の言つていた事と矛盾している。あの電話の男は確かに、最近来た子供が1人で穴を掘つていと言つていた。しかも、スコップなんかでは埋めれなさそうな大穴だ。

あの男は嘘をついてる…。進吾はそう思った。しかし…何故…？
何故、あの男は…嘘を…？パン屋のおばさん「大丈夫かい？」進吾
「あつ…すみません…。少し考え事を…」

パン屋のおばさん「ほれ、あんたが考え込んでいる間に来よったよ」
おばあさんが指差した先には、穴へと入って行く女性の姿があった。
おばあさんによると、この近くにある保育園の園長らしい。やが
て、ちよつとしよげながら穴から出てきた。

進吾は、保育園の園長にも話を聞く事にした。進吾「すみません。
お話よろしいでしょうか？」園長「あ、はい。何か？」進吾「金山く
んについてなんですが…。あなたは何をしようとしたんですか？」園
長「ああ！私はその子に絆創膏をあげようとしたんですよ」進吾「絆
創膏ですか？」園長「ええ。あの子、泥だらけでも擦り傷だらけで
も穴を掘るからね。いつも痛々しく思ってた絆創膏をあげようとして
るんだけど、拒否されました。やっぱり佐久間さんの絆創膏が良いの
かしら…ふふっ…」進吾「あつ…佐久間さんつて…金山くんと一緒に
穴を掘っていると言う？」園長「ええ。私が子供の頃からずっと1人
で穴を掘り続けていましたから。最近になってあの子も掘り始めて、
作業が楽になったつて言っていました」進吾「佐久間さんは…ご職業
か何かをやられていらつしやる方ですか？」園長「いえ、職にはつい
ていないと仰っていました。いつも黒い和服みたいな服を着ていて、
白い首かけタオルを巻いています。さつきあの子に言われたんです
けど、今日はお墓まいりに行つてるんですつて」進吾「お墓まいり？」
園長「ええ。何でも、佐久間さんの育ての親同然の人らしくて。47
年前に亡くなられたらしいですけど」進吾「あ…。其の御方の御墓が
ある墓地はどこでしょうか？」園長「無流ムル墓地と言う所です」進
吾「はい！ご協力、ありがとうございます！」進吾は早速、佐久間
さんと言う方に会うことにした。「おや、進吾さんじゃないですか」
緑のローブを纏った男が、話しかけてきた。

宇宙ビジネスマン　ヴァルカヌス星人こと、羽屋　丈二だ。

進吾「羽屋さん！また誰かにお届けものですか？」丈二「ああいや、
仲間の宇宙人の命日だね。お墓まいりに行つてたんだよ。大家さん

や店長も来てたんだが、みんな別方向に帰ったよ」進吾「仲間の宇宙人：？」丈二「うん。47年前、人間の集団心理っていう怖い感情で命を落としたメイツ星人って言うんだ。進吾さんはまだ生まれてなかったから知らないと思うがね」進吾「47年前にそんなことが：」丈二「ああ。全宇宙に波紋を呼んだよ。衝撃的な事件だったからね。だけど、良少年も元気にしてたし何よりさ」進吾「良少年って：？」丈二「嗚呼！御免ね！佐久間 良！この辺で47年間、休む事なく穴を掘っている人だよ」進吾「佐久間さん！ちようど僕も其の御方に会おうと思ってたんですよ！」丈二「そうだったのかい！あ、そうだ！進吾さんに耳寄りな情報をあげるよ！」進吾「え？耳寄りな情報？」丈二「うん！地球防衛の役に立つと思うからね！」進吾「あ：：ありがとうございます！」丈二「今朝、大家さんが言ってたんだけど、この世界の地球にヤプールって奴が来たらしいんだ」進吾「ヤプール？」丈二「ヤプールは、宇宙全土を悪に染めようとする邪悪な異次元人なのさ。あのアパートの住人達に比べても、改心する気は無さそうさ。って大家さんは言ってたよ。後、ヤプールは怪獣よりも強い『超獣』を使うんだ。進吾さんも十分に気をつけてね！」進吾「忠告、有難う御座います！」丈二「では、僕はこれで。頑張ってるね！ウルトラマンビズファス！」く無流ムル墓地くメイツ星人の墓とみられるお墓の前で、ひたすら手を合わせている中年男性が居た。

男性は、とても痩せていた。和服のような服を着て、白い首かけタオルを巻いている。彼が佐久間さんと言う方だろう。手を合わせるのを終えた佐久間に、進吾は話しかけてみた。進吾「佐久間さん：：ですか？」佐久間良「はい。佐久間ですが：：何か？」進吾「金山くんについてなんですが、貴方はあの子と、いつも穴を？」良「ええ。私は47年間、ずっと掘っていますが、金山くんとはまだ3ヶ月ぐらいしか掘ってませんよ」進吾「後：：、何故宇宙人のお墓まいりを：？」良「：あの宇宙人、いや、金山のおじさんは：私の命の恩人なんです。家も家族も失った私に、手を差し伸べてくれたのが：金山のおじさんだったんです」進吾「金山って：」良「ええ。あの子と同じ名です。何かの偶然か？」進吾「金山さんと言う方は：優しい人だったんですね

「良」はい。大好きでした。けど…ひたすら穴を掘っていた私は、宇宙人の疑いをかけられ、暴徒と化した住民達に殺されそうになった私を庇って…おじさんは…命を散らしました…立派な最後でした…」進吾「そうでしたか…」良「私が穴を掘っているのは、おじさんが埋めた円盤を掘り出すためなんです。掘り出して、メイツ星に行つて…おじさんを知っている人に謝罪したいんです…。まだ…掘り出せてはいないんですがね…」帰りしなに進吾は、金山の墓に手を合わせた。謝罪の気持ちが溢れ出る。

「ありがとうございます。おじさんも、喜んでくれるはずですよ」

その時だった。河川敷がある川の方に、巨大な怪獣が現れた。

大きな目を持ち、緑色の体色をしている。蛾のようだった。

蛾のような怪獣は、何故か河川敷へと向かつて行く。あのまま行けば、金山少年が穴を掘っている所だ。

良「金山くん…!」

進吾「あつ! 佐久間さん! 危ないですよ! 佐久間さん!」

佐久間を止めようと、追いかける進吾。

そんな時、羽屋がやって来た。丈二「進吾さん!」進吾「あつ! 羽屋さん! あの怪獣は!」丈二「いや、怪獣じゃない。あいつは超獣、ドラゴリーだ」

進吾「あれが…超獣…」丈二「遂にヤプールが動き始めた! 十分に注意してくれたまえ! 僕はみんなと合流して、住民の避難を!」「ありますが…ありがとうございます! 僕は佐久間さんを追わないと…」金山少年は、ドラゴリーの進行方向が自分である事を察し、足元がすくんで動けなくなっていた。

佐久間が助けに入る。「金山くん! 大丈夫かい!」

「あ…おじさん! 怖いよ…」

「大丈夫だ! 君とこの穴は…私が守る!」その時だった。河川敷沿いを流れる川の水が光り、ドラゴリーの前に2体の怪獣が現れ、立ち塞がった。オイル怪獣 タツコングと、ヘドロ怪獣 ザザンだ。まるで、佐久間と金山少年を守るかのように、2体の怪獣はドラゴリーに挑んでいく。タツコングがドラゴリーの手に噛み付くと、ザザンが

ドラゴリーに体当たりを食らわせる。よろめくドラゴリー。しかし相手は、怪獣よりも強い“超獣”。徐々に、タツコングとザザーンを圧倒していく。ドラゴリー自慢の怪力で、タツコングの右腕がもぎ取られた。雄叫びを上げるタツコング。

「あつ……くそっ！」

「おじさん！危ないよ！おじさん！」佐久間が3体の元へと飛び出した。敵わないのは分かっている。だけど、勇気を出して立ち向かわなければならぬと、佐久間は思ったのだ。自分を助けてくれた……金山のように、今度は自分が……彼と同じ名の金山少年を救う時だと。その時、ザザーンを押しつけて、ドラゴリーが両手からミサイルを発射した。

ミサイルは、佐久間の目の前で着弾し、佐久間は爆炎の中に消えて行った。金山「おじさあああああん!!!」

絶叫する金山少年。進吾がやっと追いついたが、もう遅かった。進吾「佐久間さあああああん!!!」金山「おじさん……おじさん……うわあああああ!!!」金山少年からとてつもない量の怒りの感情のオーラが発生し、そのオーラが川に次々と流れていく謎の男「ふっふっふ……。良いぞ……！」その様子を、ニヤニヤ笑いながら見ている謎の男が居た。川がドス黒く濁り、そこから悲鳴のような声が聞こえたかと思うと、巨大魚怪獣 ムルチが姿を現した。

辺りには、土砂降りの雨が降ってきた。ムルチに引き寄せられている金山少年。良「ううっ……！ああっ！やだ……！」謎の男「はっはっは！はっはっは！」謎の男がケラケラ笑う。……が。ムルチが雄叫びを上げて、ドラゴリーに体当たりを食らわせる。

吹っ飛ばされるドラゴリー。

謎の男が驚愕する。謎の男「なっ……なんだと……!?何故……あのガキは……ムルチと融合しないんだ……!?何故だ！何故……ドラゴリーを攻撃する……!?!」
「ムルチがあの子を、守ろうとしたのだよ。あの子の怒りが、乗り移っているからな」

謎の男に、突然現れた佐久間のような服を着た男が言う。

謎の男はフウ……とため息をつく。謎の男「今回の作戦は……失敗か

たつてしまおう。

すると、ドラゴリーは掴んでいたムルチの尻尾を離し、ビズファースの方へとぶん投げた。ムルチと直撃してしまうビズファース。川辺まで吹き飛ばされてしまった。カラータイマーが点滅を始める。ドラゴリーは、倒れ込んでいるムルチの上顎を強引に引き裂こうとする。悲鳴のような叫び声を上げるムルチ。うっすらと涙を浮かべていて、とても痛々しい。ビズファース「ウオオオオ！デユワツ！」

ビズファースは、渾身のドロップキックをドラゴリーに食らわせ、ドラゴリーは吹っ飛んだ。

解放されるムルチ。ビズファースにペコツとお辞儀をする。

よろめくドラゴリーの腹部に、ビズファースは渾身の左ストレートを打ち込む。ビズファースの拳は、ドラゴリーの腹部を貫通し、大きな風穴を開けた。苦しむドラゴリー。すかさず、ムルチも火炎放射で応戦する。そして、ビズファースは必殺の『ビズニウム光線』を浴びせた。風穴を開けられていても、必死に光線に耐えるドラゴリー。しかし、流石に耐え切れなかったようで、腹部に光線は直撃。ドラゴリーは爆発四散した。ドラゴリーを倒したビズファースはしばらくの間、空を呆然と眺めていたのだった。進吾に戻ったビズファースは、すぐに金山少年の様子を確認しに行ったが、そこに彼は居なかった。すると其処に、佐久間のような服を着た男が金山少年を抱え、佐久間をおぶさりながらやって来た。進吾「あつ！佐久間さん！金山くん！無事だったんだ…！良かった…！」進吾は涙を浮かべる。

佐久間の様な服の男「ミサイルの爆炎に巻き込まれる前に、救出したんだ。この子は河川敷浴いに倒れていたから保護したよ」佐久間のような服を着た男が言う。良「此の御方の御陰で助かったんです。本当に…有難う御座います!!あの…御名前は…？」

ビオ「ビオ…メイツ星人ビオと申します。あなたの事は知っていますよ、佐久間 良さん…。私の父を愛して下さり、助けて下さり、ありがとうございます…」良「おじさんの…お子さんでしたか…！う

うっ…。こちらこそ…謝罪させて下さい…。私のせいで…あなたの父親を死なせてしまつて…ううっ…本当に申し訳ございません…」
ビオ「良いのですよ…良さん…」彼らは熱い抱擁をして、47年越しの再会を果たした。いつの間にか雨は上がり、空には綺麗な虹がかかっていった。ムルチも、まるで役目を果たしたかのようにスーツと消えていった。ムルチがいた場所には、金山が埋めたという円盤があったのだった。金山の息子であるビオのおかげで、メイツ星に行ける事になった佐久間は、改めてメイツ星人達に謝罪し、彼の最後を同族達に語った。彼の47年越しの夢が叶ったのだ。金山少年は、児童養護施設に引き取られ、学校にも通い始めたそうだ。

ぶつきらぼうな性格だったらしいが、今では明るく元気に学校生活を送っているらしい。進吾「隊長…結局、野暮用って何だったんですか？僧侶みたいな服も着てましたし…秀行「嗚呼…野暮用というのは、空間のヒビの調査だよ。僧侶っていうのは…どういう意味だ？進吾。俺は2人も居ないぞ。はっはっは」進吾「ん？何だったろう…？」

夜の街のとあるビルの屋上の空間にヒビが入ったかと思うと、音を立てて、まるでガラスのように空間が割れた。

割れた空間から、黒ずくめの服を着た男が現れた。
ビオと会話していたあの謎の男だ。

手には大量の超獣が描かれた風船を持っている。

「ふっふっふ…さつきはメイツ星人の小童に邪魔されたが儂は諦めた訳ではないぞ…。この世界の地球にも…絶望を味あわせてやる…！
行け！超獣達よ！この久里虫太郎（くりむしたろう）…いや、異次元人 ヤプールに従うのだ！はっはっは…はっはっはは！」

第4話 異次元超人の侵略

くくとある パン屋くく

少年「パンくださいな」パン屋のおばさん「はい、いらっしやい」少年「今日もおじさんとおばさん、仲良しだね！ほら、いつも同じ指輪してるよね？」パン屋のおじさん「はっはっは。坊や、これは結婚指輪って言うんだよ」

パン屋のおばさん「うふふ。もう君も、そんな事を言うような歳になつたのね。はい、どうぞ！いつものクリームパンよ。おまけに：じゃん！このパンも入れてあげる」

少年「わあ！ありがとう！…おまけしてくれたパンに書いてる字：何？」パン屋のおじさん「あ、これは『A』って書いてあるんだよ。このパンも美味しいよ」少年「おじさん、おばさんありがとう！じゃあね！」

く「ERIK A」日本支部 研究室く 進吾の同期であり、日本支部のオペレーターでもある高宮ゲンは、研究室で1人になって悩んでいた。

高宮「『メカニックの天才』とも言われる、ヨシダ博士にも怒られちゃったよ…。はあく」対怪獣用プログラムであった『マケット怪獣』が、怪獣よりも強い超獣の登場によって、一からプログラムの改良をしなければならなかったからだ。怪獣よりも強い超獣よりも強いマケット怪獣を作る為に。まだまだマケット怪獣には改良点があったのも、データ入れ直しの原因の一つであったのもあり、高宮のメンタルはボロボロであった。初期から決められていたマケット怪獣であるアギラ、ミクラス、ウインダムのプログラムの入れ直しは完了したが、残りの6体のプログラムはそのままだ。その事を考えると、頭が痛くなってくる。『大丈夫かい？ゲン。目の下にクマもできている。睡眠は大事だよ』高宮「わかったよ…『パル』、ありがとうな。じゃあ遠慮なく！おやすみく」パル『…単純な奴だ…』

高宮が作った人工知能『パル』は呆れる。何せ、高宮はもうスヤスヤと寝息を立てて寝ている。パル『手伝ってやろうかな…』

ヤプール「いよいよだ…。行け！超獣達よ！」ビルの屋上に居座っていたヤプールは、手に持っていた風船のうち、9つを天高く飛ばした。やがて破裂したかとおもうと、東京の上空に巨大な気球船が現れた。

それだけではない、巨大なバイオリンが空に浮かんでいる。

カップル♂「えっ!?バイオリン浮いてる！すげえ！でっけえ！マジックか何かか!?!」

カップル♀「そうだね！」少年「ママー。お空にでっかいバイオリン」「あい！あいつたら！見て見て！あの気球船とバイオリン！怪獣かもよ!?!」

「はいはい…凄いですね。うん」

パン屋を経営している夫婦も、その事を不思議に思っていた。

一方その頃、「ERIKKA」のオペレーションルーム内は、電話対応で大忙しだった。進吾「あぁもう！高宮君はどこですか！隊長は防衛軍との会議でアメリカに居るのに…」

「パムムウ…」蓮加「進吾く。高宮君は、まだマケット怪獣の調整中みたい…。はい、これ。『喋りかけないください』だって！もう！」ハネジロー「パムツ！」

ケント「まあまあ、御2人とも！そうカリカリしたらダメですよ？ほら、通報してきた事を僕がまとめておいたから。見てくれないかい？」

進吾と蓮加は、夢日のパソコンの画面を覗き込む。

ハネジローも覗き込もうとするが、2人が邪魔で見えない。ハネジローはしよげて、わ自分の寢床に入ってしまった。

進吾「うわぁ…。結構まとめましたね…」

ケント「えーつと…。『ビルの上に巨大な卵』『仮面公園によくわからない怪獣の像』『道を歩いていたら、緑色の巨大な影が通った』『会社のビルの壁に魚の化石』『東京中の信号機がおかしくなって危ない』『時々目が光る雪だるまが、雪も降っていないのに家の前にある』などだね。どれもこれも、おかしな話だ」蓮加「いったい何があったんで

すかね…?」ケント「一応、避難勧告を出しておいたけど…大丈夫なのかな…」

避難した人は、遠くの方から異常現象の様子を見ていた。

「あっ！気球船が降りてきた！」

「バイオリンもだ…」

「まずは貴様らだ…。目覚めろ！バッドバアロン！ギーゴンよ！」

気球船と巨大バイオリンはまばゆい光を放つと、2体の超獣へと変化した。

気球船超獣 バッドバアロンと、バイオリン超獣 ギーゴンだ。

「現場の有希です！謎の気球船とバイオリンは、怪獣へと変貌しました！繰り返します！怪獣へと変貌しました！」

2体は楽器店などを破壊すると、東京中で暴れ始めた。

蓮加「東京都内に超獣と思われる2体の怪獣が出現！」

ケント「やつぱり超獣でしたか！チーム『ワイバーン』に出撃命令を…」

ゲン「はあ…はあ…。夢日ケントさん！僕が行きます！」

疲れ切ったような高宮が、駆け込んで来た。

ケント「た…高宮君…！だけど…大丈夫かい？目の下にクマもあるし…」高宮「大丈夫です！『パル』が手伝ってくれたのもあって、すぐ終わりましたよ！マケツト怪獣達の、初舞台です！」蓮加「もう一体、超獣出現！」

目が光る雪だるまが真っ二つに割れた時、雪超獣 スノーギランも現れた。

ビルを凍らせるなどして暴れる。

ゲン「進吾くん、蓮加ちゃん。君達も協力してくれるかい？」進吾「あ、うん良いぜ！」蓮加「別に良いですわ…」

進吾

と蓮加と高宮は、超獣達が暴れまわっている東京都内にやって来た。

まだ逃げ遅れた人達が居たようで、進吾達は必死に避難誘導をす
る。進吾「パン屋さんですか？早く逃げてくださいね！」パン屋のお
じさん「ありがとうございます！」

避難も一安心した所で、高宮は本題を進吾と蓮加に話す。

高宮「良いかい？スーパーガンの先端にこのカプセルを取り付け
て、相手にめがけて撃つ！そうしたら、マケット怪獣が召喚されるよ。
マケット怪獣の制限時間は3分間。ビジターと同じだがらわかりや
すいかな。進吾くんには、ウインダムとシルバゴンとエレキングを！
蓮加ちゃんには、ミクラスとレッドキング、ミラクロンを！僕は、ア
ギラとリトラとゴメス！わかったかい？」進吾「アドバイスありがとう
う！じゃあ！みんな無事でね！」蓮加「進吾もコケるんじゃないわよ
〜」進吾「うっ…うるさいなあ！転んだりしないよ！」進吾「よーし
…。行け！ウインダム！」蓮加「行つけー！ミクラス！」高宮「行っ
てらっしゃい！アギラ！」リングのような物が積み重なって、カプセ
ルのようになる。その中から、マケット怪獣達が姿を現わす。高宮
「やった…！成功した…！」その様子をまじまじと見るヤプール。ヤ
プール「ふん…。こんな事は想定内だ…。どれ…お手並み拝見とする
か…」ウインダムは生真面目過ぎる知能にしてしまったせいで、テス
トプレイなどでは命令が無ければ動く事も無かったのだが、データの
作り直しによって自分で攻撃の判断が出来るようになった。ウイン
ダムはギーゴンに立ち向かっていく。ギーゴンは脳波破壊音波『デ
ス・サウンド』を出して攻撃するが、ロボット怪獣であるウインダム
には通用しない。ウインダムは、頭部からのレーザーショットと
チョップで、ギーゴンを圧倒していく。進吾「流星…超獣よりも強く
なってる！高宮君！大成功だよ！」高宮ゲン「うん！こっちもさ！ア
ギラ、ツノで攻撃だ！」弱気な性格のアギラは、データの入れ直しも
怖がって拒絶していた問題児だったのだが、弱気な性格もデータの入
れ直しにより解消。バッドバアロンの出す風を利用してエリマキを
はためかせて気合いを入れる。

自身の頭部にある二本の鋭いツノが武器だ。

バッドバアロンのムチ攻撃と突風攻撃を、アギラは素早い動きでか

わわしていく。そして、バッドバアロンの腹部に強烈な頭突きを叩き込んだ。

おもわず吹っ飛ぶバッドバアロン。アギラは頬杖をつきながら挑発する。

怪力自慢のパワーファイターであるミクラスは当初、力の加減が上手く合わず手当たり次第に辺りの物を壊してしまっており、そのせいでデータにプログラムされていた筋力と自身の力が比例しなかった。途中で不具合を起こしてしまっていた。

だが、データの作り直しによつて不具合を修正し、筋力と力も比例するようになった。

先程も述べた通り、怪力の持ち主であると同時に、頭部のツノと分厚い体表も兼ね備えている。

スノーギランが吐く冷凍ガスも、ミクラスの分厚い体表は通さない。冷凍ガスを物ともせず、スノーギランに体当たりをお見舞いする。「トドメだー！」 ウインダムはレーザーショットをギーゴンの弦に向けて、横一文字に放つ。たちまちギーゴンの弦は、火花を散らしながら切れる。そのままウインダムは、ギーゴンの頭部に最大出力のレーザーショットを放射。ギーゴンは、頭部から爆散して果てた。アギラの挑発にしぶれを切らしたバッドバアロンは、腕のムチを振り回しながらやって来る。アギラは、今だと言わんばかりに猛ダツッシュ、バッドバアロンの腹部に頭部のツノを突き刺す。ツノを突き刺したまま、苦しむバッドバアロンを道路に張り倒すと、全体重を使つてツノをめり込ませる。耐えきれなくなつたのか、バッドバアロンは苦しみながら爆発した。ミクラスの渾身のボディプレスが、スノーギランに炸裂する。うめき声を上げるスノーギラン。冷凍ガスが効かないことが分かつているので、パンチや光線などで応戦するものの、ミクラスははねのけて行く。そして、スノーギランにリアアットを食らわして気絶させると、ミクラスはすかさず口から赤い光弾を発射。

スノーギランはその場に倒れ込んで果てたのだった。

進吾「戻れ！ウインダム！」

蓮加「お疲れ様！ミクラス！」 ゲン「ありがとう！アギラ！」

役目を果たした三体は、カプセルへと戻っていった。

ほう…ここまでとは…。さあ！超獣達よ！目覚めるのだ！マケツト超獣を倒せ！倒すのだ！」

ビルを突き破って怪魚超獣 ガランが。

怪獣像から火花を散らして、暗黒超獣 ブラックサタンが。

狂った信号機の光が一点に集中した所から、信号超獣 シグナリオンが。

ビルの上の卵が孵化し、そこから古代超獣 カメレキングが。

東京中を動き回っていた緑の影から、鈍足超獣 マツハレスが。

超獣達が次々と東京に現れた。蓮加「うわっ！何なのかしら？あの数！」ゲン「残りの超獣達も使わないといけないみたいだね…」「よし！高宮君！蓮加ちゃん！行こう！」

進吾はシルバゴンをカメレキングに、エレキングをブラックサタンにめがけて召喚した

蓮加はレッドキングをマツハレスに、ミラクロンをシグナリオンに、高宮はリトラとゴメスをガランにめがけてそれぞれ召喚した。

(ウルトラマンビズファスよ…)

「はっ！誰だ!？」(私はヤプール…後ろのビルの屋上に来るのだ…)ヤプールは進吾にテレパシーで語りかけて来た。「俺は、ビルの上から超獣達を援護しておくよ！」

「あつ…ちよっと！進吾！」進吾は、指示されたビルの屋上に到着した。「お前がヤプールか…」

「いかにも、私がこの宇宙を絶望へと叩き落とす者！異次元人 ヤプールだ！」

「先日のドラゴリーと、この超獣軍団もお前が操っていたのか？」

「その通り。ドラゴリーの件は世話になったぞ…。ムルチを上手く使って、ドラゴリーと共に人間共を大混乱に陥れるつもりだったが…まさか人間の芯がそこまで強かったとは…。少し見くびっていたよ…人間をな…」

「今はマケツト超獣が、超獣達を追い詰めているぞ！さあ！観念しろ！」

エレキングは、ブラックサタンに口から三日月状の電撃光線を浴びせる。
対するブラックサタンは、尻尾からのミサイルや高熱火炎で応戦する。

エレキング自慢の長い尻尾の一撃が、ブラックサタンに決まる。
ブラックサタンは、思わず弾き飛ばされる。

暴れ者のレッドキングは、その有り余るほどのパワーと、凄まじい闘争本能をどう調整するかが課題だった。

その結果、子育て時のメス個体のデータに、オス個体のパワーをインプットする事に成功。

性格は比較的温厚になり、元々レッドキングは仲間意識が高い怪獣だったのもあってか、他のマケット怪獣を敵だと認識しないようになる事にも成功。

命令に忠実なパワーファイターになった。

マツハレスの高速移動に、思わず目を回すレッドキング。

レッドキングが目を回しているすきに、マツハレスは体当たりを食らわせようとするが、背中にある『マツハラジエーター』をたまたま掴んだレッドキングがもぎ取り、速度が鈍くなる。

めまいが回復したレッドキングが放ったドロップキックを食らい、マツハレスは派手に吹っ飛ばされる。

『マケット怪獣の完成形』と称される程、当初の欠陥が無く、パワー調整も上手く成功したのがミラクロンだ。

シグナリオンが放つ破壊光線が、ミラクロンを襲う。

ビルにぶつけられたりされたが、ミラクロンは手からの電撃攻撃で逆襲。

シグナリオンの身体に付着している光線発射用の装飾を、次々と電撃攻撃や怪力で破壊していく。

元々、敵同士だったリトラとゴメスだが、協力攻撃用のプログラムへと改良したことにより、抜群のコンビネーションで攻撃することが可能になった。

強酸『シトロネラアシッド』の連発などもデータ設定により可能に

なり、ゴメスも体内に核エネルギーがインプットされた為、爆発的なパワーを手に入れた。

ガランの右肩付近に、リトラは『シトロネリアシッド』を連射する。右肩の集中攻撃に苦しむガラン。

そこにすかさず、背びれを発光させたゴメスが、口から熱線を放射する。

ガランの右腕が集中攻撃によって吹き飛び、その場でガランは悶絶する。

シルバゴンは、渾身のパンチをカメレキングの腹部に叩き込む。

泡を吹いて倒れるカメレキング。そこにシルバゴンは、口から青い光弾を放射する。

カメレキングはたちまち大爆発を起こし、倒れた。

ブラックサタンがエネルギーを供給しようとするが、エレキングはツノから妨害電波を放射。地団駄を踏むブラックサタン。

ブラックサタンはヤケクソでエレキングに突進するものの、勢い良く頭から石油タンクに突入する。

そのすきにエレキングは、ブラックサタンの身体に長い尻尾を巻きつける。

そして、身体から大量の電撃を放つ大技『エレキングコレダー』を発動。

既にオイルを被った身体に、大量の電流が流れ、ブラックサタンの全身から炎がメラメラと燃え上がる。

その後、間も無くしてブラックサタンは大爆発を起こして果てた。爆発性のある岩石を、レッドキングは口から放出する。

マツハレスに直撃した岩石爆弾は、派手な音を立てて爆発する。たまらず吹き飛んでしまうマツハレス。

レッドキングはのびているマツハレスの首を持ち上げ、両手でマツハレスの首を力一杯絞める。

「メキッ」と鈍い音が鳴ったと思えば、マツハレスは白目を剥き、口から泡を吹いて倒れた。

シグナリオンは、身体の装飾を光らせて放つ三色破壊光線をミラクロンに浴びせる。ミラクロンはその光線を必死に耐える。

シグナリオンの猛攻が途切れたのを確認したミラクロンは、念力光線『ミラクロン・エレキネシス』を発射。

シグナリオンは吹き飛び、頭部の赤い発光体を道路にぶつけた。

赤い発光体が砕け散り、シグナリオンはうめき声を上げたかと思うと、光の粒子になって消滅した。

リトラとゴメスのコンビネーション攻撃に、タジタジになるガラン。

片腕を吹き飛ばされたものの、ガランガスをがむしやらに乱発させるガラン。

リトラは身軽な動きでガランガスを避け、ゴメスに至ってはガランガスを逆に吸収し、核エネルギーへと変える荒技を披露する。

リトラが『シトロネラアシッド』をガランの両足に放出し、ガランの動きを鈍らせる。

そこにすかさずゴメスが熱線を放射し、ガランの腹部に直撃。

ガランは大爆発を起こして死亡した。

ゲン「やったぜ！」

マケット怪獣達は、カプセルへと戻っていった。蓮加「残るはあのオレンジと青の超獣だけだわ…！頑張つて！ビズファース！」バキシムが手から出すミサイルで、ビズファースに先制攻撃をけしかける。バク転でミサイルを避けるビズファース。ミサイルの1つを足で蹴り飛ばし、バキシムにぶつける。

苦しむバキシム。ビズファースは追い打ちで光の光弾『ビズファースラッシュ』をバキシムに向けて放つ。

バキシムは『ビズファースラッシュ』を腕で受け止め、頭部のツノを勢いよく飛ばす。バキシムの必殺技『ユニコー・ボム』だ。『ユニコー・ボム』は、ビズファースの腰に直撃し、ビズファースはビルに突っ込んでしまう。ビズファース「グワアッ！」蓮加「あっ！ビズファース！ちよつと高宮君！マケット怪獣貸して！ビズファースを援護するから！」

「ちよつとちよつと！待って下さい！マケット怪獣は再チャージまで1時間はかかるんです！」

ビズファスは腰を抑えながら立ち上がる。

カラータイマーが赤に点滅する。

バキシムは、追い打ちをかけるように腕からミサイルを発射する。

バキシムの集中放火を浴び、膝をついてしまうビズファスそのまま立ち上がらない。蓮加「あつ！ビズファス！」

ヤプール「バキシムよ！ウルトラマンビズファスにトドメを刺すのだ！」バキシムは『ユニコー・ボム』を発射させた。ビズファスに一直線に向かって来る。もうみんながダメだと思った時、ビズファスは『ユニコー・ボム』を受け止めた。あの時、ビズファスは集中力を高めていたのだ。ビズファスは『ユニコー・ボム』をバキシムにぶつけ返す。うめき声を上げるバキシム。ビズファスはすかさず、必殺光線『ビズニウム光線』を放つ。

ビズファスは、バキシムの『ユニコー・ボム』で負った傷に光線を集中させる。耐えようとしたバキシムだったが努力もむなしく、大爆発を起こして死亡した。

「やったー！」

「凄い！凄いよ、ビズファスか！」

傷つき疲れながらも、必死にバキシムを倒したビズファス。

そんなビジターに、ヤプールが語りかけて来る。

「はーっはっはっは！待っていたぞ！この時を！ウルトラマンビズファス！貴様をバキシムと戦わせておいて良かったよ…。もう貴様の身体はボロボロだ！このヤプール自ら、貴様を倒してやる！」

そう言うと、ヤプールは持っていた最後の風船である4つを割った。

「カウラー！マザリユース！マザロン人！ユニタングの怨念よ！主人である私に集え！私に万物を破壊する力を、全てを支配する力を与えよ！見よ！ウルトラマンビズファスよ！これが最強超獣 ジャンボキングだ！」ヤプールはそれぞれの超獣達の魂を吸収し、宙へ浮かぶとヤプールの身体がドス黒く光る。

そして最強の超獣 ジャンボキングへと変貌したのだった。

「もうビズファスはボロボロなのに…。もう一体の超獣?!」

ジャンボキングは、体力が残り少ないビズファスを徹底的に痛めつける。

目から放つレーザーや、圧倒的な腕力でビズファスを地面に叩きつける。

腹部を踏まれながら苦しむビズファス。

そこへ、ジャンボキングへと変貌したヤプールが語りかける。

「貴様らウルトラマンなどという奴らは気に入らなくてな…。見るだけで虫唾が走るんだよ!ウルトラマンビズファス!消えろ!はっはっはっはっは!はっはっはっはっは!」

その時だった。道路に先ほど、進吾が避難させたパン屋の夫婦が現れた。

パン屋の夫婦の指には、『A』と書かれた指輪の先端部のクリスタルが光っていた。北斗「ヤプールめ…。思った通り、この世界にもやって来ていたか…」夕子「行きましよう。久しぶりに!」

パン屋の夫婦は、少し距離を開けると、叫びながら走り出した。北斗「夕子おとおおおお!」南「星司さあああああん!」

パン屋の夫婦はそう叫ぶと、天高く飛び上がり、空中で一回転を決め、指輪を着けた右手を合わせてこう叫ぶ。

2人「ウルトラタッチ!」

パン屋の夫婦がまばゆい光に包まれ、その光の中から、伝説のウルトラ戦士 ウルトラマンエースが現れた。

えっ?」

「もう1人の…ウルトラマン…!?!」

ビズファスも呆然とする。

エースはビズファスの方を少し見て、その後ジャンボキングに語りかける。

A「ヤプール、そこまでだ!」ヤプール「何だ?!?貴様、ウルトラマンエース!この世界でも私の邪魔をする気か!させんぞ!」A「セブン兄さんから、貴様らがこの世界で潜伏しているとの情報があつた

ビズファスは『ビズニウム光線』を、エースは『スーパーメタリウム光線』をそれぞれジャンボキングに発射する。

合体光線の直撃を食らっても、倒れないジャンボキング。

エースはトドメとして『ギロチンショット』をジャンボキングに向けて放つ。

『ギロチンショット』はジャンボキングの首を切断した。

「グアアアアアアアア!!おのれええええええええええ!!許さんぞ〜〜〜!ウルトラマンA〜〜〜!」

ボトツと地面に落ちるジャンボキングの頭部。

そして、ジャンボキングの胴体と頭部は大爆発を起こす。

まるで、ヤプールの悪事が完全に潰えた事を暗示させるように。

ビズファスから戻った進吾は、先ほどのパン屋の夫婦に問いかける。

進吾「ありがとうございます…!あなた方は…いったい…」北斗

「私は、北斗 星司。そしてこちらが…」

南「南 夕子です。ウルトラマンビズファスさん。あなたが援護してくれたのもありました。私達だけでは、あの超獣を倒す事は出来なかったでしょうから」

進吾「いえ…だけど…本当にヤプールは、滅んだんですかね…?」南「ああ。ヤプールは滅んだ。だが、超獣の生き残りがまだ居るかもしれない。その時は君がやるんだ。優しさに満ちた、君がね」

「でも…」北斗「…優しさを失わないでくれ。弱い者をいたわり、互いに助け合い、どこの国の人達とも、友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。たとえばその気持ちだが、何百回裏切られようと…。それが私の、君への願いだ」南「北斗さん…」南「私達はこの世界を、もう少しで去ります。あなたはこの世界を、仲間達と共に守る自信、覚悟はありますか?」

進吾「…ええ!」南「ふふっ…。良い返事です。頼みましたよ。ウルトラマンビズファスさん」

北斗「では、この辺で」

2人「ウルトラタッチ!」

北斗と南は、ウルトラマンエースへと再度変身する。

A 「ヘアツ！」

そしてエースは、空高く飛んでこの世界から去って行った。

進吾は一人、見送りながらポツリと言う。

「……有難う御座いました！ウルトラマンエースさん……！」

続く

第5話 かまいたちの禍々

くく ERIKA 日本支部の富士山駐屯地くく

蓮加「地底約1500mの地点に怪獣と思われる反応を確認致しました!!」進吾「現在その影は動きを止めています。」蓮加「隊長! 攻撃しますか?」秀行隊長「ああ。これより地底貫通弾による攻撃を開始する!」

ドゴオオオオオン!

その時、大きな音が鳴り響いた

秀行隊長「なんだ今の音は!?!」

蓮加「...! 怪獣です! 怪獣が現れました!」秀行隊長「何!?! 地下にいるんじゃないのか?」進吾「いや! この怪獣この反応やつだ! 地底の反応が消えました!」

ドゴオオオオオオン!

秀行隊長「モニターで怪獣の姿を確認する!」

モニターには腕に大きな鎌を持ち白い毛が生えし怪獣が手の大鎌を振っていた。

秀行隊長「あつあれは！」

蓮加&進吾「御存じなのですか！隊長！」

秀行隊長「太平風土記に書かれている魔獣、カマイタドンだ！」

カマイタドンへギリヤアアアアア
!!!!!!

カマイタドンは鎌を振った。

その斬撃はかまいたちを発生させ、ERIKAの駐屯地を破壊した。

カマイタドンは其の中を進んでいった。

カマイタドンが突然出現したことにより、機能が完全に麻痺した駐屯地。

カマイタドンへグオウアアアアア!!!

カマイタドンは一通り暴れた後、地面の中へ去っていった。

くく「ERIKA」（エーリカ）基地くく

秀行隊長「みんな！カマイタドンは、黒部町にいる事は間違いない！探してくれ！」

ン。ビズファスはすかさず、必殺光線『ビズニウムショット』を放つ。

ビズファスは、カマイタドンの『ビズファースラッシュ』で負った傷に光線を集中させる。耐えようとしたカマイタドンだったが努力もむなしく、大爆発を起こして死亡したのだ！

☒☒「面白くなって来たぞ〜！ウルトラマンビズファース！さあ！
行け！キリエロイドよ！いや！キリエルよ！」

そう言い、その青年は、キリエロイドを召喚したのだ！

キリエロイド「分かった！待っている！」

第6話 蘇る超古代竜

☒☒ 「ここか。超古代の怪獣が眠っているというのは。」

此処はイースター島にそこに1人の青年の姿があった。

☒☒ 「超古代竜メルバが眠っているのか……。」

☒☒ はそう言うと、赤黒い稲妻を発生させ、それを地面に向ける
と…… ☒☒ 「さあ目覚めよ！「超古代竜メルバ」よ！」

そう言つて、赤黒い稲妻を拳に纏わせ、地面を思いつきり殴つた。
すると、メルバ「クアアアアアア！」背中の翼を広げ、月に向かって
咆哮するメルバ。そして、メルバはイースター島を飛び立ち、何かに
引き寄せられるようにモンゴルに出現したのだ！秀行「蓮加と一緒に
モンゴルに飛んでくれ。」

進吾「了解！」

こうして、進吾はモンゴルに飛んだ。

くくモンゴル砂漠地帯くく

蓮加「メルバを攻撃するわよ！」

進吾「だね！」

☒☒ 「此処か！此処にもう一体の超古代怪獣が眠っているの
か……。」☒☒ はそう言うと、メルバの時と同様に、赤黒い稲妻を発生
させ、それを地面に向けると…… ☒☒ 「さあ目覚めよ！「超古代怪獣
ゴルザ」よ！」

そう言うと、手から赤黒い稲妻を発生させ、それを地面に叩きつけ
た。

すると、その付近からゴルザが出現した

市街地に進撃するゴルザ。

☒☒ 「目覚めたか！では、チャオ！」

蓮加「発見！メルバだけじゃなくゴルザまで！」

そんなゴルザの顔に、数発の光弾がヒットした。

光弾が飛んできた方向をゴルザが見ると、

進吾「怪獣！こつちだ！」

そう言うと、進吾は今度はビームを銃から発射した。

だが、流石に鬱陶しく思ったのか、ゴルザは頭部からビームを発射した。

そのビームは、進吾の目の前に着弾し、進吾をぶっ飛ばした。

そして、進吾「ここで負けてたまるかああああ!!!」

そう叫ぶと、進吾はメタモビジターを掲げ、爆発の炎やエネルギーを吸収し、ウルトラマンビズファスに変身した。

蓮加「ウルトラマン・ビズファス……！」ビズファスは構え、ゴルザとメルバと睨みあう状態になった。

そしてまずは、ビズファス「シユワツ！」ゴルザに先制のパンチを浴びせようとしたが、いとも容易く弾かれてしまったのだが、

ビズファス「ウオオオオ！デユワツ！」ビズファスは、渾身のドロップキックをゴルザに食らわせ、ゴルザは吹っ飛んだのだ！

で同じ感じで渾身のドロップキックをメルバにも食らわせたのだが、空を飛びメルバは飛び去り逃げてしまった！

ビズファスは必殺の『ビズニウム光線』を浴びせた。風穴を開けられていても、必死に光線に耐えるゴルザ。しかし、流石に耐え切れなかったようで、腹部に光線は直撃。ゴルザは爆発四散したのだ！

〃〃秋田県の石油コンビナート〃〃

キリエロイド「おう！お帰りなさい！」

〃〃「さあ！行くが良い！オイルドリッカー！」

キリエロイド「俺はまだか？」

〃〃「オイルドリッカーが負けたらだなあ！」

第7話 炎魔の戦士

〃〃日本 秋田県の石油コンビナート地帯〃〃
ギイイイエエエ!!!

「!?!」

突然響いた甲高い鳴き声に人々はコンビナートの方を見る。

そこには50メートルぐらいはありそうな巨大な角を生やした超獣が海から這い出て来て石油を捕食していたところだった。

市民A「あ、あ、ああ………」

市民K「嘘だろ………」

市民B「ちよ、超獣だあ!!」

市民達「!!」うわあああ!!」

ギイイイエエエ!!!

彼等を追いかけて破壊の限りを尽くしているオイルドリッカー!

〃〃モンゴル〃〃

蓮加「メルバを逃しました!」

秀行『秋田県の石油コンビナートにオイルドリッカーが出現した!』

進吾「ビズファスは必殺の『ビズニウム光線』を浴びせた。風穴を開けられていても、必死に光線に耐えるゴルザ。しかし、流石に耐え切れなかった見たいで、腹部に光線は直撃。ゴルザは爆発四散したのだけどもさかの連戦かなあ!? シュワッジ!」

蓮加「あれ? ビズファスがいない?」

〃〃秋田県の石油コンビナート〃〃

ビズファスはオイルドリッカーに向かってキックをお見舞いする。いきなりの攻撃にオイルドリッカーは後方へと吹き飛ばされ

ビズファス『ディアッ!!』 ビズファスは、オイルドリッカーに向かってジャンプをした上で繰り出しキックを仕掛けた!

ビズファース「テユワツ！」オイルドリンカーに先制のパンチを浴びせようとしたが、いとも容易く弾かれてしまった。

ビズファース「ハッ！」必殺光線である『ビズニウムショット』を浴びせるものの、あまりダメージを受けていないようである！

ビズファースは追い打ちで光の光弾『ビズファースラッシュ』をオイルドリンカーに向けて放つ。

オイルドリンカーは『ビズファースラッシュ』を腕で受け止め

跳ね返して来たのだ！ビズファースは戻って来た『ビズファースラッシュ』をオイルドリンカーにぶつけ返す。うめき声を上げるオイルドリンカー。ビズファースはすかさず、必殺光線『ビズニウムショット』を放つ。

ビズファースは、オイルドリンカーの『ビズファースラッシュ』で負った傷に光線を集中させる。耐えようとしたオイルドリンカーだったが、努力もむなしく、大爆発を起こして死亡したのだ！キリエロイド「負けたぞー！行って良いんだなあ！」

☒☒ 「はい！」

キリエロイド「では、行って来るぞー！」

キリエロイド「やあ！ウルトラマンビズファースよ！」そう言い、キリエロイドは蹴りを加えて来たのだ！ビズファースは右手でキリエロイドの首腹にパンチを決め込むキリエロイド「グワッ！何ってなー！そう言い、キリエロイドはビズファースに蹴りを入れて来て

ビズファースは吹っ飛んだ

戦いが3分を過ぎたタイミングでビズファスの胸の○のカラータイマーが赤く点滅してしまおう！

ビズファスは右腕を空へと掲げて左腕を横に広げて自身の前に円状の輪を出現させる。そしてその両腕を十字に重ねた。

ビズファス・進吾「新技！エメジエントンカノン!!」

その十字に重ねた腕から放たれた光線はキリエロイドに直撃すると・・・キリエロイドはその光線に耐えられずに爆発四散した。

ビズファス「シュワツ!!」

戦いを終えたビズファスは両腕を上と掲げて空を飛び去っていく。

☒☒「チツ！キリエロイド！使えなかったか！」

第8話 シビルジャツジメンターの出現

〃〃東京都 秋葉原〃〃

☒☒「行け！ギャラクトロンMK2！」

〃〃「ERIKA」日本支部のオペレーションルーム〃〃

秀行「秋葉原にギャラクトロンmk2が出現した！行つトイレ!!進吾！蓮加！」

進吾&蓮加「分かりました！」

〃〃秋葉原〃〃

進吾「さあ！超獣も倒せたし、ギャラクトロンも倒せるかな？行け！アギラさん！」

蓮加「其れ！ちよつとだけ酷いよ……」

リングのような物が積み重なって、カプセルのようになる。その中から、マケツト怪獣達が姿を現わす

進吾「アギラ！ツノで攻撃だよ！」

エリマキをはためかせて気合いを入れる。

自身の頭部にある二本の鋭いツノが武器だ。

ギャラクトロンmk2のブーメランのような投擲攻撃とギャラクトロンシュトラールを、アギラは素早い動きでかわしていく。そして、ギャラクトロンMK2の腹部に強烈な頭突きを叩き込んだ。

おもわず吹っ飛ぶギャラクトロンmk2。アギラは頬杖をつきながら挑発する。

アギラの挑発にしびれを切らしたギャラクトロンmk2は、大量の必殺技を使いながらやって来る。アギラは、今だと言わんばかりに其の攻撃を交わしながら猛ダッシュし、バッドバアロンの腹部に頭部のツノを突き刺す。ツノを突き刺したまま、苦しむギャラクトロンmk2を道路に張り倒すと、全体重を使ってツノをめり込ませる。耐えきれなくなったのか、ギャラクトロンMK2は苦しみながら爆発した！
そしてクリスタルは落ちたが……

蓮加「勝ったわ！」

進吾「だな！蓮加」

☒☒「こんな事で敗れるなんて……まあ良い！今がチャンスだ！行け！ギャラクترونmk2！」再度☒☒はクリスタルとループジャイロを使い召喚した！

進吾「蓮加ちよつといれ！」

蓮加「分かったわ！行つてらっしやい！」

くくトイくく

進吾「ビズファアアアくくくス！」進吾はメタモビジターを掲げて、ウルトラマンビズファースに変身した

ビズファースはギャラクترونMK2の周りを高速で駆け回ってかく乱し追い打ちで光の光弾『ビズファースラッシュ』をギャラクترونmk2に向けて放つ。

ギャラクترونMK2は『ビズファースラッシュ』を腕で受け止め、後頭部のギャラクترونベイルを勢いよく飛ばして来た。『ギャラクترونベイル』は、ビズファースの腰に直撃し、ビズファースはビルに突っ込んでしまう。ビズファース「グワアッ！」蓮加「あっ！ビズファース！」

ビズファースは腰を抑えながら立ち上がる。

カラータイマーが赤に点滅する。ギャラクترونMK2は、追い打ちをかけるように腕からギャラクترونゲベール

手の甲からギャラクترونシユトラールを打ってくる！

ギャラクترونMK2の集中放火を浴び、膝をついてしまうビズファースそのまま立ち上がらない。蓮加「あっ！ビズファース！」

ギャラクトロンMK2は『ギャラクトロンベイル』を発射させた。ビズファースに一直線に向かって来る。もうみんながダメだと思った時、ビズファースは『ギャラクトロンベイル』を受け止めた。あの時、ビズファースは集中力を高めていたのだ。ビズファースは『ギャラクトロンベイル』をギャラクトロンmk2にぶつけ返す。ギャラクトロンmk2。ビズファースはすかさず、必殺光線『ビズニウム光線』を放つ。ビズファースは、ギャラクトロンmk2の『ギャラクトロンベイル』で負った傷に光線を集中させる。耐えようとしたギャラクトロンmk2だったが努力もむなしく、大爆発を起こして死亡した。戦いを終えたビズファースは両腕を上と掲げて空を飛び去っていく。

☒☒ 「チツ！何故だ！あの野郎！」

第9話 帝国猟兵出現

「ERIKA」日本支部のオペレーションルーム

秀行「進吾！蓮加！いつも有難うな！だから3日間休暇をあげよう！服でも買いに行きな！」

進吾&蓮加「分かりました！」

蓮加「進吾くん！行こ！渋谷パルコへ！」

進吾「分かったよ！」

秀行「だが、何が有るか分から無いから、マケット怪獣を2体持つて行け！蓮加！」

蓮加「分かりました！」

「東京 渋谷」

「ゲームスタートだぜい！好きな食べ物！好きな食べ物！パイんでっす！」
「がそう言い、クリスタルとループジャイロを使いベリアル銀河帝国という帝国の帝国猟兵であるダークロプスを召喚した！」

ダークロプス「俺の名は、ダークロプス！帝国猟兵だ！」

そう言い、ダークロプスは、渋谷の街を破壊していた！

「パルコ店内」

進吾「闇の波動を感じたなあ！蓮加ちゃんは買い物をしていて！俺トイレ！」
蓮加「分かったわ！」
「パルコ店内トイレ」
進吾「ビズファアア」
「ス！」

進吾はメタモビジターを掲げて、ウルトラマンビズファスに変身した！

ビズファス「シュワッ！」
帝国猟兵ダークロプスに先制のパンチを浴びせようとしたが、いとも容易く弾かれてしまったのだが

ビズファス「ウオオオオオ！デウワッ！」
ビズファスは、渾身のドロツプキックを帝国猟兵ダークロプスに食らわせ、帝国猟兵ダークロプスは吹っ飛んだのだ！

ビズファスは必殺の『ビズニウム光線』を浴びせた。風穴を開けられていても、必死に光線に耐える帝国猟兵、ダークロプス。しかし、流石に耐え切れなかったようで、腹部に光線は直撃。帝国猟兵、ダークロプスは爆発四散したのであったが、「行け！これが恐竜戦士だ！行け！ザウラーよ！」

するとザウラーが出現し、ビズファスに炎の光弾を放って来たのだが、

蓮加「買い物を終えたよ！つてえっ？恐竜みたいな怪獣だ！行っけ〜！ウインダム！ミクラス！ビズファスを助けてあげて！」

ザウラー「ウルトラセブンの僕のカプセル怪獣か！あんなへぼを俺の戦わせるなんてぎげんなく〜！」

そう言い、ギーゴンの『デス・サウンド』以上の脳波破壊音波を出して攻撃するが、ロボット怪獣であるウインダムには通用しない。ウインダムは、頭部からのレーザーショットとチョップで、ザウラーを圧倒、

何で俺より奴が強いんだ！クツソ〜！ならば、冷凍光線！だが、ミクラスは、体表が分厚い為、冷凍ガスを物ともせず、ザウラーに体当たりをお見舞いする。

ザウラー、何だと貴様等！するとミクラスは、ザウラーの右手に、ウインダムは左手を押さえつけたのだ！

進吾「ビズファス！行くぞ！」

ビズファス「おう！ビズファスライトニングカウンターゼロ！」

これにより恐竜戦士ザウラーは、爆発四散した！

蓮加「御疲れ様！ミクラス！ウインダム！」

進吾「お〜い！お〜い！」

蓮加「進吾君も御疲れ様！」

進吾「蓮加も御疲れ様だぜ！ミクラスやウインダムを召喚してピズ
フアスさんを助けてくれたんだろ！」

蓮加「うん！そうだよ！後休暇は残り3日貰っているんだから！」

進吾「そうでしたね！」